

解体時に廃棄されるシカの皮を資源として活用する

—シカ革ワークショップを通じてシカを巡る現状を知ってもらう—

森と木のクリエイター科 森林環境教育専攻 松川 英史

1. 研究背景

1-1 背景

近年、野生鳥獣による森林被害面積は減少傾向にあるものの、長期にわたるシカの生息数の増加及び生息域の拡大により森林の被害は深刻な状況にある。被害防止等の観点から、捕獲が進められている。

捕獲を進める中で農林水産省は被害防止のために捕獲を進めるだけでなく、捕獲鳥獣を地域資源（ジビエ等）として利用することが重要とし、ジビエ振興に力を入れている。これにより、捕獲されたシカは解体処理施設へ運ばれ食肉等として活用されるようになったが、その利用率は捕獲されたシカの 1 割程度と低く、9 割近くが埋設・焼却処分されている。（自家消費を除く）

私自身、狩猟免許を持っていたものの入学するまでシカに纏わる背景を知らなかった。

1-2 事前調査

現状を知るため岐阜県内にある 20 の解体処理施設へヒアリングを行った。運び込まれたシカは肉とその他の部位に分けられる。肉以外の部位に関してはその多くが廃棄されていることがわかった。特に活用されることのない皮はほぼ捨てられていることが分かった。

2. 研究の目的

廃棄率が一番高い皮の有効活用ができないかと考えた。廃棄予定の皮を資源として活用し、ワークショップ（以下 WS）を通して【シカを巡る現状を知ってもらう】ことができるかを検証する。

3. 研究の流れ

- ①WS の企画 ②実践 ③アンケートの結果
④考察 ⑤まとめ ⑥今後の課題と可能性

4. WS の企画

4-1 企画の概要

時期：10 月～1 月（計 10 日間）
場所：関市、美濃市、郡上市、揖斐川町
対象：小学生以上（定員 2～4 人）
※実践①は 20 歳以上、プレ WS は学生
制作物：三角コインケース、プレスレット、キーホルダー

参加費：500 円～2000 円

4-2 WS の目的

- a. レザークラフト体験を通してシカを巡る現状を知ってもらう
b. 革を利活用をする上での課題を洗い出す
c. WS を通じて参加者の反応から他にどんな可能性があるのかを探る

4-3 WS で知ってもらうこと

- a. 森の中でシカが増え過ぎていること
b. 増加による森林被害とその影響
c. 捕獲されたシカの 9 割が埋設・焼却処分されていること
d. 皮の有効活用

4-4 WS の流れ

- ①受付②事前アンケート③森やシカについての話
④制作⑤ふりかえり⑥事後アンケート

4-5 事前・事後アンケート

目的の達成度合いや課題を把握するために事前事後でアンケートを実施。

4-6 制作物について

子どもでも使えるハサミやカッターなど身近な道具を使い、簡単に、気軽に、短時間で制作可能な三角コインケースを製作。端切れはプレスレットやキーホルダーとして活用。

4-7 革について

解体処理施設から入手した岐阜県内で捕獲されたシカの皮を利用。自ら下処理を施し、鞣し業者によりレザーに加工したものを WS に使用。

5. 実践

【プレ WS】①学内 4 人 ②学内 1 人

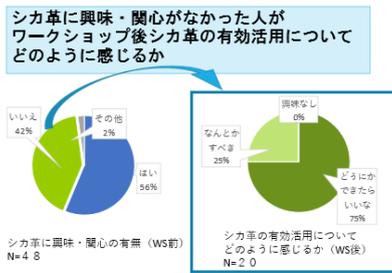
【実践】①本町ベース 3 人 ②翔楓祭 25 人 ③カムカムカフェ 3 人 ④ミノマチャマーケット 7 人 ⑤谷汲緑地公園 12 人

延べ 7 会場 10 日間 参加人数：55 人

6. アンケートの結果から

WS の目的が達成できているかを読み解く。

a. レザークラフト体験を通してシカの現状を知ってもらう



図① WS 前後のシカ革有効活用への関心の変化

WS 前にシカ革の有効活用について無関心だった42%の参加者が WS 後には全員が課題解決に向けた意識を持ったことが分かった。

また、自由記述ではシカを巡る現状についての記述があったのは52人中34人で全体の65%であった。さらに分析してみると大人と子どもとの比較で約18%程の差がみられた。

b. 革を利活用する上での課題を洗い出す



図② 革製品を購入する上での課題

アンケートから「どこで買えるかわからない」「そもそも流通していない」などの回答が多く販売場所や周知の方法に課題があることが見えてきた

c. WS を通じて参加者の反応から他にどんな可能性があるのであるのかを探る

c-1 子どもの反応

当初、大人向けの WS であったものを小学生以上と変更したため知ってもらうのは難しいと思っていたが、小学低学年の参加者から「シカは悪くないのに殺されてかわいそう」との反応もみられた。

c-2 参加者の意識の変化の一例

中山間地域に住んでいる人にとってシカは身近な存在で鳴き声がうるさかったり、接触事故などによりシカは厄介者という認識であったが、WS に参加することで、シカが廃棄されていることや利用されていないこと、資源として活用できることを知り有用なものであるという認識が変わった。

c-3 想定外であったこと

WS をきっかけにシカのことについてさらに学びを深めたいと思ったり、通常のレザーでは欠点になってしまう穴や端の方の革であえてデザインに取り込み作品を作るなど見られた。



写真① 想定外のデザイン

8. 考察

アンケートの回答からは参加者全体の65%に現状を知ってもらうことができたと推定できる。ただし、子どもに関して伝わりにくかった要因の1つとしては、早く制作したかったことが考えられる。実際にアンケートで10人中8人が参加の動機がクラフト体験が目的と回答している。また、シカ革は一般的に品質面で難があるとされるが、WS で初めてシカ革に触れる人にとっては品質難とは受け止められず、むしろ「良質な革」「加工しやすい」など素材として良好な印象が伝わった。

9. まとめ

解体処理施設から引き取った皮であっても、WS でも十分使える事もわかり、廃棄されるシカの皮を資源として活用することができた。また、WS を行ったことで参加者の反応からもシカ革の素材の良さを確認することができた。大人向けのプログラムとしてはシカの現状を知ってもらうことができたが、対象が子どもとなると改善の必要がある。

10. 今後の課題と可能性

10-1 課題

①解体処理施設側の課題

- ・野生の生き物が相手であり、季節や天候などの要因で入荷が不定期なため、作業の効率化が難しくコストがかかる。
- ・解体処理施設の規模が小さく従事者が1人というところも少なくなく精肉作業以外に取り組むことが出来ず、皮を廃棄することに繋がっている。

②消費者側の課題

- ・全国各地で地域おこし協力隊など普及啓発に取り組んではいるがまだ一般化できていない。
- ・購入場所や購入方法の周知に課題がある。

10-2 可能性

一般的にシカの現状やシカ革製品の良さを知らない人が多いからこそ、知るきっかけさえできれば、意識向上につながる可能性を見出した。今後も WS 等での普及啓発活動を通じて関心層の裾野を広げネットワークができることで新たな製品開発アイデアや市場開拓の可能性が見えてくる。こうした好循環が生まれることで解体処理施設で廃棄されていた皮の経済的な価値も再認識され皮の利活用が進む可能性が見えてくる。